

「経済史」

問 1

1

出題意図

ポトシ銀山を、単なる地名・鉱山名としてではなく、16 世紀以降の世界経済の形成と結びつけて説明できるかをみる問題である。具体的には、スペイン帝国によるアメリカ大陸支配、銀の大量産出、ヨーロッパ・アジアをつなぐ交易の拡大、そして先住民労働の動員といった点を、経済史の観点から整理できるかを問う。

解答例

ポトシ銀山は、16 世紀半ばに現在のボリビアで発見され、スペインの植民地支配のもとで開発された銀山である。16 世紀後半には一時世界最大の銀産出地となり、ここで産出された銀はスペイン財政やヨーロッパの商業を支えた。また、ポトシ銀山に代表される中南米銀のヨーロッパ流入は、従来、16 世紀の価格革命の重要な要因とされてきた。しかし、その原因を銀流入だけで説明できるかをめぐっては、現在は歴史学上の論争がある。他方で、その採掘は先住民の強制労働に大きく依存しており、植民地支配の性格もよく示していた。

2

出題意図

反実仮想的アプローチの内容と意義を、経済史学の方法論との関係で理解しているかを問う。具体的には、現実には生じた歴史過程と、ある政策・制度・条件が存在しなかった場合の仮想的状態とを比較することによって、その歴史的効果や因果関係を検討する方法であることを説明できるかをみる。あわせて、この方法がロバート・フォーゲルの 1964 年の研究により経済史で先駆的に展開され、その後は現代の実証経済学でも広く用いられるようになったことを理解しているかを確認する。

解答例

反実仮想的アプローチとは、現実には生じた歴史過程に対し、ある政策や制度、条件が存在しなかった場合を仮定し、その仮想的状態と実際の結果とを比較することで、歴史的事象の効果や因果関係を考える方法である。経済史では、ロバート・フォーゲルの 1964 年の研究『Railroads and American Economic Growth』がその先駆的業績として知られる。この方法は、歴史の「もし」を通じて因果関係を明示的に考える道を開き、その後は現代の実証経済学でも広く用いられるようになった。この方法の意義は、歴史の「もし」を明示的に考えることによって、現実には生じた事象の歴史的 position や意味を、より明確にとらえられる点にある。

出題意図

マーシャル・プランを、単なる対欧援助ではなく、第二次大戦後の西欧復興と資本主義世界秩序の再建を進めた歴史的契機として理解しているかを問う。具体的には、ドル不足の緩和、生産と貿易の回復、西欧諸国の経済協力の促進、さらに戦後国際経済秩序の形成との関連を、経済史の観点から整理できるかをみる。

解答例（修正版）

マーシャル・プランは、1947年にアメリカが提唱し、1948年から実施された西欧復興援助である。第二次大戦後の西欧では、生産の停滞に加え、輸送などのインフラの損傷や混乱、さらに深刻なドル不足のために、原料・食料の輸入や域内貿易の拡大が妨げられ、復興は停滞していた。これに対してアメリカは、資金と物資の供与を通じて西欧の生産回復を支えただけでなく、各国に復興計画の共同調整を求め、その受け皿として OEEC が成立した。これにより、西欧諸国の経済協力と貿易自由化が促され、戦後の国際経済秩序への再統合が進んだ。また、ソ連と東欧諸国が参加しなかったことで、マーシャル・プランは欧州における東西冷戦の画期ともなった。したがってこれは、新しい形での西欧資本主義の再建と、戦後の資本主義世界秩序の形成を進めた重要な契機であった。

問2

出題意図

イギリス産業革命と石炭の関係について、石炭を単に蒸気機関のエネルギー源として捉えるだけでなく、その役割を産業革命全体の条件の中でどのように位置づけるか、またその理解が研究史の中でどのように展開してきたかを説明できるかを問う。特に、近年ではポメラantzが、石炭を土地・森林資源の制約を緩和しうる要因として位置づけ、イギリスと中国の分岐を考える重要な論点としたことと、アレンが、高賃金・安価な石炭という価格体系のもとで、石炭利用型技術が経済合理性を持った点を強調し、工業化の先行を説明したことまで整理できるかをみる。

解答例

イギリス産業革命と石炭の関係については、古くから、石炭がイギリスの工業化を支えた重要な条件の一つであったと考えられてきた。例えば、マサイアスは、イギリスが石炭をはじめとする資源を比較的有利に利用しえたことを、工業化を準備した基礎的条件として位置づけた。石炭は、何よりもまず蒸気機関の燃料として重要であり、さらに都市暖房の燃料として木材不足を補い、コークス製鉄を可能にし、鋳工業や輸送の発展も支えたからである。

しかし近年の研究では、この問題はより精密に捉え直されている。ポメラantzは、18 世

紀のイングランドとの比較対象として、中国全体ではなく江南のような先進地域を設定したうえで、イングランドでは成長中枢の近くで石炭を利用しやすかったのに対し、江南では主要炭田が遠く、石炭が同じようには使えなかったことを、大分岐の重要な条件として論じた。さらにアレンは、この問題を単なる資源賦存ではなく相対価格の問題として捉えた。アレンによれば、イギリスでは賃金が高く、石炭が安かったため、労働を節約し石炭や資本を多く使う技術が経済的に合理的であった。しかも石炭は当初、木材より劣った燃料と見なされていたが、木材燃料の高騰のもとで、煙突や炉を備えた石炭向きの家屋への適応が進み、暖房用石炭利用も広がった。そのうえで、蒸気機関・コークス製鉄・機械制工業のような石炭利用型技術が普及したのである。したがって石炭は、単なる燃料としてではなく、価格体系・都市生活・技術選択を通じて産業革命を可能にした条件として理解するのが適切である。